

食品流通の光と影

内田敦之

●モノ不足からモノがあふれる時代へ

社会主義体制の崩壊、民主化、市場経済への移行とともに旧体制の流通システムが崩壊し、モノ不足が続いた。モノ不足は一九九二年にピークとなり、日本のメディアでもこのことが、さまざまな形で紹介された。この年の秋、私はウランバートルをはじめ訪れたが、肉、小麦、食用油、砂糖、アルヒ（モンゴル・ウォッカ）など主要な食料品が配給制になっており、国営デパートやあちこちの商店の陳列棚には空きが目立ち、行列も目についた。

市場経済移行期のモンゴル国にとって、この頃は経済的にもっとも苦しい時期であったが、他の発展途上国で報じられているような飢餓については、あまり伝えられなかった。広大な国土に人口二三〇万、この大きな小国では、極限の状態で、都市と地方の間で伝統的な互助システムがうまく機能したのである。うがった見方をす

れば、飢餓の苦しみを経験していないから、それに安住し、発展への推進力が鈍っているのかもしれない。

この状況の中から、現在ではザハとよばれる市場がたくさんでき、さまざまな食料品があふれるまでになった。ザハは体育館か倉庫のようなスペース、あるいは屋外に陳列台を並べその上に商品をおいただけの市場である。

私は一九九四―九六年にウランバートルで生活したが、食料品は目に見えるほど目どと豊かになっていった。日本人観光客をザハに連れていくと、よほど覚悟してからモンゴルに来ていいのか、たいていの人は「なんだ、モノがあるじゃないですか」と驚く。お金さえ出せばいろいろなモノが買えるようになっていた。ただ、最悪の時期に比べれば落ち着きを取りもどしつつあるが、一九九七年に入ってもインフレは依然激しく、公務員や一般のサラリーマンの暮らしは苦しい。

ある食料品ザハに並ぶ食料品を表にあげてみた。ただし、夏期以外の季節には野菜、果物の種類が大幅に減り、いろどりを欠くことをつけ加えておきたい。

●流通を担う人びと

短期間にこんなにモノが豊かになったのは、担ぎ屋とよばれる人びとが、物資を運びこんでいるからである。



ザハの中。

この担ぎ屋をモンゴル語で「ガンザガン・ナイマーチン（鞍に付いた革ひもの商売人）」という。「ガンザガ」は本来、狩りに出かけた際、獲物をくりくりつける鞍の革ひものことである。マーケットに並んでいる食料品の産地を見ると、世界を飛び回る彼らの活躍ぶりがわかる。かつてユーラシア大陸を舞台に、縦横に活躍した時代を彷彿とさせるのではない。

モンゴル国は、ユーラシアの内陸にあって「陸の孤島」などと言われることもあるが、逆に言えばアジア・ヨーロッパ諸国と陸続きである。さらに近年、ウランバートルは、モスクワ、北京、フフホト（内蒙古）、アルマトイ（カザフスタン）、大阪、ソウル、ベルリンなどの都市と直行便で結ばれ、空からもどんどん物資が入ってきている。

ビールの例をあげてみよう。ウランバートルでは、いながらにして世界のビールが味わえる。ドイツのレーベンプロイ、ベックス、チェコのピルスナーウルケル、オランダのハイネケン、デンマークのカールスバーグ、シンガポールのタイガー、中国の北京、五星、韓国のクラウン、アメリカ合衆国のエール……、数え上げればきり

がない。この頃は日本のキリンやサッポロもときおり飲めるようになった。

モンゴル国にもトンガラグ（澄んだ）、ニースレル（首都）などの国産びんビール、はかり売りの生ビールがあるが、残念ながら、生産量が少ないためあまり見かけることはない。これらのビールが日本の半分以下の値段で飲めるので、ビール通にはたまらない。ただし、世界的に有名なブランドのビールでも、製造年月などよく見て買わないと、長距離を運ぶ途中で品質が劣化しているものがある。

●モノの流れの問題点

ガンザガン・ナイマーチンらの活躍で、モノは豊かになっていく。外面だけ見れば「ダイナミックに躍動するモンゴル国」という印象を与えるが、その一方で国民の毎日の生活に影を落とす暗部もある。

社会主義時代、あらゆる面でブレーキの役割をはたしていた体制の圧力がなくなり、モラルが低下し、弊害が出てきている。多くの個人商人があらわれ、商品を右から左へ転がして利益を得るようになったが、彼らがするのはほとんど一過性の商売で、責任のある仕事をしない。

拝金主義がはびこり、金のためなら何でもやるという者さえいる。

その最大の問題の一つが、内容を問わずどんなものでも輸入して売ってしまうということだ。そのため品質の粗悪な食料品が大量に入ってきており、食中毒などが新聞・テレビで頻繁に報道されるようになった。とくに夏期には保存上の問題も加わって、被害が多数発生している。いくらモンゴルが涼しいといっても、暑い日にはウランバートルで三〇度を超える。冷蔵設備がととのっていない、あるいは管理がずさんなど、保存状態が悪いとすぐに腐らせてしまう。

一九九五年一〇月には、著名な医師が、外国人がよく宿泊するホテルのレストランで食事をして死亡した。原因はポテトサラダに使われた生卵による食中毒ということである。

この事故のあと、日刊紙「アルディン・エルフ」に「モンゴル人が生き残れる保証はまったくない」という見出しの記事が掲載された。ある記事によると、このホテルのレストランは、その前月に冷蔵庫が故障し、調理人の衛生面にも問題があるということで、五万トゥグル

グ（約一万円）の罰金を課されて注意を受けたばかりだった。このように人命にかかわるような違反でも、その罰金の上限は二〇万トゥグルにすぎない。

「わが国に食料品の安全の保証はあるのか」との問いに対して、当時の厚生大臣が「保証は政府や大臣や省庁が出せるものではなく、消費者自らが生存を保証すべきである。保証付の食料品を買い、食べる習慣を身につけることが重要である」と答えたという。

また別の記事では、ある会社がドイツから輸入したNATO軍の携帯食は、検査の結果 aflatoxin B1 という物質が基準値以上検出され、人体に有毒ということであった。このことが報道されたとき、私はすでにこの携帯食を食べてしまったあとだった。ハンバーグやパスタはけっこううまくいった。

また、ネコの模様の包み紙の中国製キャンディは、実はキャットフードだった。モンゴル消費者権利保護協会は、上記二商品を販売禁止にするという警告を出したが、あちこちの店で売られ続けていた。

さらに、記事は続く。食品関係の企業・工場の従業員七七・三％は専門知識がない、食堂の六〇・四％は衛

生面で問題があり、三八・七％は水道が通っていない、三四％は食品運搬用の冷蔵庫がない、五〇・一％は冷蔵庫がない……という警告を国立衛生・伝染病・微生物研究センターが出した。この広大な国の四〇カ所以上の国境の管理事務所のうち、衛生検査官は六カ所にしかないという。また、国境が開かれる短期間に大量の食料品が入ってくるため、現在の態勢と設備では十分な検査ができないのが現実である。このように、食料品に関するさまざまな問題が論じられた。

これを好機として、食中毒問題を何とか解決しようという気運がもたらがり、具体的な対策がとられるのかと思っていたが、同年一月、ふたたび医師らが食中毒にかかった。続いてウランバートル・カーベット工場社長が食中毒で死亡した。いまだに食中毒問題は、根本的な解決ができないでいる。

●対策と援助

メディアがあればと騒いだなかで、いったいどんな対策が講じられたのだろうか。輸入食料品の安全検査は国立規格化・度量衡研究所が管轄することになっているが、同研究所の検査態勢も、自由化後、物資の大量流入に対

応できず、また検査機器も老朽化がはげしいため適正な検査ができない状態である。

検査機器の刷新を日本政府援助で実施したいと要請を出していたが、最新機器を導入しても有効利用できるかどうか問題となり、実施されないまま数年が経過した。最新技術習得のための専門家派遣の要請も並行して出していたが、こちらも優先順位が低く、実施のめどはたっていないようである。そのうち韓国の援助により検査機器が導入された。検査態勢が十分に整備されれば、問題の一部解決につながるにちがいない。

それにしても常に最新の機器が供与される援助のあり方は改善の余地があるのではないか。その国の発展レベル、条件に合った機器が供与できれば、もっと有効に活用され、その国の発展にいつそう寄与できるのではないだろうか。

モンゴル国でも他の開発途上国と同様に、援助される側よりむしろ援助する側の主導で援助がなされているのではという疑問がわく。火急の問題で、国民の生活に密着し、社会問題化しているにもかかわらず、要請が出されてから数年間も実施が見送られてきてしまったことは

残念なことだ。

食料品の危険性を訴え、食料品の安全性検査ができるような態勢づくりのプロジェクト実施に向けて、あらゆる努力をしていた国立規格化・度量衡研究所職員（しんしん）な取り組みが忘れられない。

食の安全性は、いうまでもなく国家・民族の安全保障にかかわる問題である。一九九一年以降、穀物の生産高は年々二〇%ほど減少しており、一九九三年以降はジャガイモ等、野菜の生産も大きく減少している。このように民主化後おとろえてしまった農業を、何とか再生して、より安全な国産の食料品の供給を安定させる方向に、関係各機関が引っ張っていく必要に迫られている。農業を再生・発展させることで、食糧問題を解決するばかりでなく、農耕文明のすぐれた点、たとえば勤勉などを学び、モンゴルの文化に取り入れることができれば大いにプラスになると、ある年輩のモンゴル人が語ってくれた。隣の中国には、安価で品質の悪いモノから高価で品質のよいモノまであらゆるモノがある。目前の利益に走って、粗悪品を買って運んで売っているのは、ほかでもないモンゴル人自身である。自分たちの安全は自分たちで

守っていく、受け入れ側である自分たちの態勢をととのえていく、そんな強い意志をもたなければ、この国をどうやって守っていくというのだろうか。

輸入商品を含めた食料品の安全性については、食糧・農牧業省、厚生省、前出の規格化・度量衡研究所、さらに国立衛生・伝染病・微生物研究所、食品業者連盟、消費者権利保護協会などの関係機関・団体が横のつながり（これがモンゴルではなかなかむずかしいようだ）を密にして

当たらなければ、決して解決できない。

日本をはじめ世界各国が、この分野で得てきた経験を十分に活かすことができれば、さらに効率的であろう。

またこの問題を考えるとき、新聞さえも何日も遅れて届き、情報が限られてしまうため、地方では都市で販売禁止にされたモノが売られてしまう。伝統的な遊牧を守り、この国を支えている地方の牧民の劣悪な生活条件を改善する具体的な方策をぜひとも考慮しなければならない。

●肉類	
ヒツジ=750~850	
牛骨なし=1000~1100	
ソーセージ=1900	
鶏(ハンガリー)(1羽)=2700	
●穀類	
コムギ1級=270	
コムギ上級(中国)=250	
大型丸パン=150	
米(ロシア)=350~360	
ソバ(ロシア)=800	
クリ(ロシア)=38	
干うどん(250グラム)=110	
ひやむぎ(日本)(500グラム)=400	
●乳製品	
アイラグ(馬乳酒)=300	
バター(ロシア)=2500	
牛乳(計り売り)(1リッター)=140	
アーロール(乾燥チーズ)(1箱)=700	
ズーヒー(サワークリーム)=400	
チーズ(オランダ)=3700	
●野菜	
キュウリ=300~400	
ジャガイモ=150	
タマネギ=300	
キャベツ=500	
ニンジン=500~600	
ニンニク(1個)=50	
ネギ(1束)=80	
ニラ(1束)=100	
ビクルス(ポーランド)=850	
●果物	
リンゴ(中国)=500	
スイカ(中国)=600(1つ3.6キロ)	
パイナップル(中国)=600	
モモ=2800	
まくわ瓜(中国)=2000	
干ブドウ(ロシア)=1000	
バナナ(フィリピン)=1800	
●お菓子	
エクレー(1個)=130	
ウェハース(ロシア)=50	
ビーナッツ菓子(ベトナム)=150	
●その他の食料品	
砂糖(韓国)=460	
ミネラルウォーター「ボン・アクア」(1.5リットル)(香港?)=950	
食用油(チェコ)(1リッター)=1150	
ハンバーガー(屋台)(1個)=240	
ピッツァ(屋台)(1枚)=480	
サマル(松の実)(1カップ)=100	
ロールケーキ(1本)=650	
卵(1個)=55	

主要食料品とその価格。ダブル・ブーン・オール食料品ザハにて1996年7月中旬調べ。国名のない食料品はモンゴル製。価格の単位は現地通貨トゥグルグ、1円=約5トゥグルグ。

アジア読本
モンゴル

一九九七年二月五日 初版印刷
一九九七年二月一日 初版発行

編者——小長谷有紀

発行者——清水 勝

発行所——河出書房新社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三―二

☎〇三―三四〇四―二〇一(営業)

☎〇三―三四〇四―八六一(編集)

振替 〇〇―〇〇―七一〇八〇二

装丁 松田行正・竹内紀子

印刷 三松堂印刷株式会社

製本 小高製本工業株式会社

© 1997 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN 4-309-72464-7